

報告

看護基礎教育における地域診断演習の
課題提出物を評価する基準に影響する要素

The Factors Related to Assessment for Written Assignments in Classroom Exercises
for Public Health Nurses' Community Assessment in Basic Nursing Education

宮芝 智子¹⁾, 牛尾 裕子²⁾

1) 神奈川県立保健福祉大学

2) 兵庫県立大学

Tomoko Miyashiba¹⁾, Yuko Ushio²⁾

1) Kanagawa University of Human Services

2) University of Hyogo

抄 録

【目的】パフォーマンス評価の質向上に向け、地域診断演習の課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素を明らかにする。

【方法】大学の地域看護学教育に携わる教員を対象に、地域診断演習の課題提出物を評価するルーブリック(案)のモデレーションワークショップ(以下WS)を開催し、評価結果と評価理由の発表を求めた。発表内容を録音して逐語録を作成し、評価結果の差異に影響する要素を研究者間で検討し抽出した。

【結果】WS参加者は10大学13名であった。分析の結果、教員が課題提出物を評価する基準に影響した要素は、「生活・地域を捉える視点の多面性」「公衆衛生看護に向き合う姿勢」「記述内容から教員が推測した学生の理解状況」「教員による観点の解釈や目指す到達度」等であった。

【考察】パフォーマンス評価における評価者間の評価の一貫性を確保するために、演習の到達目標を明確にすると共に、期待されるパフォーマンスの例を学生に示したり、記録物やルーブリックを介した対話を取り入れたりする等の工夫をする必要性が示唆された。

キーワード：地域診断演習、パフォーマンス評価、公衆衛生看護、看護基礎教育

Key words : classroom exercises for public health nurses' community assessment, performance based assessment, public health nursing, basic nursing education

はじめに

地域看護学は、健康を支援する立場から地域で生活する人々のQOLの向上とそれらを支える公正で安全な地域社会の構築に寄与することを探究する学

問である(日本地域看護学会, 2014)。特定集団や地域住民全体を含む地域生活集団を対象とし、集団的アプローチに重きをおく公衆衛生看護活動は、地域診断が活動の起点となる。公衆衛生看護活動は、地域看護学を教授する上で欠くことのできない内容であり、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」(日本看護系大学協議会, 2018)では、地域の特性と健康課題をアセスメントする能力をあげ、地域診断に関わる能力の獲得が必

著者連絡先：神奈川県立保健福祉大学看護学科

〒238-8522 神奈川県横須賀市平成町1-10-1

(受付 2018.9.19 / 受理 2018.12.21)

要であることを示している。

地域診断は、講義の他、演習、実習を活用して教授されている（牛尾，2014）。このうち演習では、模擬的に受け持ち地区を設定し、アセスメントする方法が取り入れられており、学びはレポートやプレゼンテーションなどの学生の実演（パフォーマンス）によって評価されていた（牛尾，2014）。パフォーマンス評価とは、ある特定の文脈のもとでさまざまな知識や技能などを用いながら行われる、学習者自身の作品や実演（パフォーマンス）を直接に評価する方法であり（松下，2012）、標準テストを用いて評価できない能力を評価する方法として生み出された。パフォーマンス評価は、知識を知っている、わかっているというレベルの評価にとどまらず、多様な状況に応じて知識を使えるというレベルを評価するために不可欠であるが、定性的な評価となるため、評価者間の評価の一貫性を確保することが課題となる。地域診断演習に関する複数の先行研究（清水ら，2015；金屋ら，2016）が、地域診断に関わる演習や実習における学生の学びを明らかにしており、これは地域診断に関わるどのような学生のパフォーマンスが学習成果として示されるのかを具体的に理解するために活用できる有用な知見である。一方、その学びの評価に関しては、到達目標に対する学生の自己評価を調査している研究（有本ら，2017；鈴木ら，2017）が少数あるのみであり、教員による客観的な評価をどのように行っていくのかについて課題がある。

筆者らは、地域診断に着目し、学内演習に用いる教材を作成し、演習に用いる学び評価のためのルーブリック開発を目指してきた。ルーブリックは、評価の観点や基準が不明瞭になりやすいというパフォーマンス評価の短所を補い、評価者間の評価の一貫性を確保することに役立つツールである。筆者らは、先行研究（牛尾ら，2016）により、教員が地域診断演習の学びを評価する視点を明らかにしている。本研究では、その次段階として、教員の評価視点から導き出した観点について、観点別の評価基準（水準）の明確化に向けて、地域診断演習における課題提出物を参考に学び作品例（以下作品例）を数点作成し、これを用いて観点別に評価基準を検討するルーブリックモデレーションワークショップ（以

下WS）を実施した。ルーブリックモデレーションとは、複数の評価者で同じ作品例を評価し、その評価結果を比較・検討することにより共通理解を図る方法である。本報告はパフォーマンス評価の質向上に向けて、地域診断演習の課題提出物を評価する基準に影響する要素を明らかにし、パフォーマンス評価における評価の一貫性を確保するための課題を検討する。

研究目的

パフォーマンス評価の質向上に向けて、地域診断演習の課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素を明らかにし、パフォーマンス評価における評価の一貫性確保に向けた示唆を得る。

方法

I. WSの概要

WSの詳細については、先行研究（牛尾ら，2018）において公表しているため、本稿では概要を述べる。

参加者には事前に筆者らが作成した地域診断演習の教材を送付した。それらは、「地域診断演習のスケジュール、目的・目標、方法、学習課題を示した資料」「保健師による地区活動の事例」「地区資料」等であった。また、WS当日に、参加者に地域診断演習の課題提出物の作品例を配布し、各作品例の評価を依頼した。課題提出物の作品例とは、前述の教材を用いたA大学およびB大学での地域診断演習において、学生が作成したワークシート等の課題提出物を参考にして、学生の典型的な記述等を基に筆者らが考案したものである。作品例は、地域診断演習の学習課題1、2、3それぞれに2種類ずつあり、計6種類であった。

学習課題1は、「地域包括支援センターの保健師が担当していた高齢者A氏が自死したケースについて、A氏はなぜ自死してしまったのか、原因や関連する人々を図示して説明する（事例の背景となる社会的要因の特定）」であった。学習課題2は、「A氏のようなケースを未然に防止するために必要な情報とその理由を書き出す（地域の健康課題を特定する上で重要となる情報の明確化）」であった。学習課

題3は、「保健師が取り組むべき課題を明らかにするために、A氏の事例、A氏以外の複数の事例、地区資料から得られた情報を整理し、特徴を説明する(地域の健康課題のアセスメント)」であった。学習課題1～3は、段階を追って取り組む課題であり、学習課題1を終えて次の課題に進む形にしている。

作品例の評価は次のように行った。採点の枠組みには、先行研究(牛尾ら, 2016)として明らかにした地域診断の実習・演習における教員の10評価視点に基づき導き出した地域診断の学び評価の5観点を用い、学生の学習段階を実習前および卒業時の2時点と想定し、各観点に関して優、良、可、不可の評点をつけ評価するよう求めた。5観点とは、「重要な情報の識別と関連づけ」「地域・生活の共感的理解」「社会資源の機能の評価」「説明・論述」「公衆衛生看護の専門機能に関わる価値・信念の内面化」であった。参加者個々が作品例を評価後、4から5名よりなるグループを構成し、グループ内で作品毎の評価結果と評価理由を発表、討議した。発表、討議時間は、1学習課題につき30分、計90分であった。

II. データ収集方法

地域看護学教育に関する自主勉強会メンバーのメーリングリストを用いて、WSおよび研究の概要を記載した依頼書を送り、研究協力を依頼した。また、研究協力の意思がある場合にはメールにて返信するよう依頼した。参加者の条件は、看護系大学に所属し地域看護学を教授する専任教員であり、地域看護学の実習や演習の指導と評価に直接関わっている者とした。

WSにおける作品の評価結果と評価理由に関するグループ内の発表、討議内容について、参加者の了解を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成してデータとした。

III. 分析方法

1. 逐語録から評価結果と評価理由について語られている部分を抽出した。
2. 作品例毎に観点別の評価結果を集計した。
3. 優、良、可、不可、その他の評点毎に評価理由を整理し比較した。
4. 同一の作品例に異なる評価結果が示されている

箇所に着目し、評価理由を比較した。

5. 3、4を通して、評価の相違に影響を及ぼす要素を共同研究者間で検討し抽出した。

IV. 信用性の確保

逐語録についてはメンバーチェックングを行った。データ分析は共同研究者間で相互に確認し、複数回検討した。

V. 倫理的配慮

研究参加候補者に対して、研究協力依頼書を添付したメールを送信し、WSおよび研究の概要、本研究への参加は自由意思によるものであり不参加による不利益はないこと、匿名性の確保、データの保管および破棄方法、研究成果の学会等への公表等を説明した。研究参加に同意した場合には、同意書に署名を得た。本研究は、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した。

結果

I. 参加者の概要 (表1)

WSおよび研究に参加した教員は10大学13名であり、女性12名、男性1名であった。年齢は30から50歳代、職位は教授5名、准教授・講師5名、助教3名、最終学歴は修士課程4名、博士課程9名であった。

表1 参加者の概要

		n=13
性別	女性	12
	男性	1
年齢	30歳代	1
	40歳代	7
	50歳代	4
	60歳代	1
地域看護学領域 教育経験年数	5年未満	2
	5～9年	1
	10～14年	3
	15年以上	7
最終学歴	修士課程	4
	博士課程	9

た。また、13名中10名が、看護基礎教育における地域看護学領域の教育経験を10年以上有していた。10大学のうち、保健師教育課程選択制が2校、統合カリキュラムが8校であった。

Ⅱ. 作品例に対する観点別の評価結果の概要(表2)

作品例に対する観点別の評価結果の集計結果を表2に示した。表中のその他の欄には、評価時間が不足し評価に至らなかった、または、作品例から観点到該当する内容を読み取ることが困難であり評価できなかった等、評点をつけなかった参加者の数を示している。

5観点のうち、「重要な情報の識別と関連づけ」「地域・生活の共感的理解」「社会資源の機能の評価」「説明・論述」については、参加者の半数以上が、全作品例に優、良、可、不可いずれかの評点をつけていた。一方、「公衆衛生看護の専門機能に関わる価値・信念の内面化」については、参加者のうち半数以上が何らかの評点をつけていた作品例が6例中3例であった。

また、各作品例に対する観点別の評点が一致した割合が5割を超えていたものは、「重要な情報の識別と関連づけ」5例、「地域・生活の共感的理解」3例、「社会資源の機能の評価」2例、「説明・論述」4例、「公衆衛生看護の専門機能に関わる価値・信念の内面化」4例であった。

Ⅲ. 課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素(表3)

優、良、可、不可、その他の評点毎に評価理由を比較した。また、同一の作品例に異なる評点が示されている箇所に着目し、評価理由を比較して、何が評点の相違をもたらしているのかを検討した。その結果、課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素として、【生活・地域を捉える視点の多面性】【思考の柔軟性と深さ】【イメージした生活・地域の特性や保健師の活動の現実適合性】【個から地域全体への視点の広がり】【公衆衛生看護に向き合う姿勢】【記述内容から教員が推測した学生の理解状況の程度】【公衆衛生看護に関する教員の信念や価値観】【教

表2 作品例に対する観点別の評価

観点	評価	学習課題1		学習課題2		学習課題3	
		作品例 1-1	作品例 1-2	作品例 2-1	作品例 2-2	作品例 3-1	作品例 3-2
重要な情報の識別と関連づけ	優	3	3	0	10	5	6
	良	8	6	1	3	5	3
	可	2	2	8	0	2	1
	不可	0	0	4	0	0	0
	その他	0	2	0	0	1	3
地域・生活の共感的理解	優	1	1	0	11	6	4
	良	7	3	1	2	4	5
	可	0	3	8	0	2	1
	不可	0	0	4	0	0	0
	その他	5	6	0	0	1	3
社会資源の機能の評価	優	2	1	0	12	4	4
	良	4	2	1	1	6	3
	可	3	4	8	0	2	3
	不可	0	0	4	0	0	0
	その他	4	6	0	0	1	3
説明・論述	優	2	2	0	12	6	4
	良	7	2	2	1	3	3
	可	0	3	7	0	2	3
	不可	0	0	3	0	0	0
	その他	4	6	1	0	2	3
公衆衛生看護の専門機能に関わる 価値・信念の内面化	優	0	1	0	5	4	1
	良	1	2	1	2	2	2
	可	2	2	6	0	1	3
	不可	0	0	3	0	0	0
	その他	10	8	3	6	6	7

表3 課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素

要素	要素を導き出した評価理由【評点】の例
生活・地域を捉える視点の多面性	<ul style="list-style-type: none"> 身体・心理・社会という3つの側面から、紙面より情報を取り出している【優】 数値を読み取り、地理・地形と健康問題を関連づけて考えている【優】 孤立=自殺という短絡的な考えがある【可】
思考の柔軟性と深さ	<ul style="list-style-type: none"> 資源がないこともきちんと分析され、あるものばかりでなく、ゼロの資源も捉えている【優】 子育てや家族の同居世代等、介護や介護予防だけでなく、ひとつの子育て世代の状況にも視点が広がっている【優】 単純に知りたい情報をあげている。かなり単純な発想で思いついた情報を、それが何のために必要かについて深く考えていないという全体的な印象がある【可】
イメージした生活・地域の特性や保健師の活動の現実適合性	<ul style="list-style-type: none"> 地域の実情をしっかりとらえており、何よりも連携まで考えようとしている【優】 保健師の活動の足りないところも書いてあり、現実的な活動に引き寄せて考えられている【優】 経済状況の悪化により先行きが不安になり自殺につながったという分析が、なぜそのように考えてしまったのだろうと引っかかった【可】
個から地域全体への視点の広がり	<ul style="list-style-type: none"> 個だけでなく地域全体に考えを広げる視点が常にでている。（同じような問題を抱えている人が）他にいないかと、潜在する他のニーズに考えを及ぼしている【優】 地域資源の状況がどうなっているか、この人達がどのように医療を受けたり介護保険サービスを使っているのか等、地域の中の社会状況を知らうとする表現が出てこない【不可】
公衆衛生看護に向き合う姿勢	<ul style="list-style-type: none"> 保健師の役割が、自身の役割のような表現をしていた【優】 保健師としてこの課題をどうしていこうという観点がなく、何か外から見てる感じで、その姿勢だと困る【可】
記述内容から教員が推測した学生の理解状況の程度	<ul style="list-style-type: none"> 「保健師さんが放置」という表現だけでは保健師を批判した言い方に思えたが、将来保健師になる学生が保健師の立場から不足点を考え、この問題点を位置づけたのは重要な気づきである【優：作品2-1の重要な情報の抽出と関連づけへの評価】 自殺を中央に図示したのは良いが、誰にも相談できなかった原因が引きこもりとなっており、ずれている。図を見た時は良い感じがしたが、なぜなのかという解釈はそれほど深くはないと考えられる【可：作品2-1の重要な情報の抽出と関連づけへの評価】
公衆衛生看護に関する教員の信念や価値観	<ul style="list-style-type: none"> 私が保健師ならばこれを絶対見なければというものを（学生の記述から）感じない。他人事のような感じ【良】
教員による観点の解釈や目指す到達度	<ul style="list-style-type: none"> どのレベルなら優かという基準が自分の中で曖昧であり評価できなかった。卒業時の段階も考えると、実習前の段階で優をつけても良いのか迷った【評点なし】 個々の事例と地域全体を見ていくバランスで評価が変わってくる。自分自身もわかりにくい【評点なし】 評価基準ごとに評価することが難しく、説明・論述などと一緒に評価しているところがある【観点に分けず全体的に評価】

員による観点の解釈や目指す到達度】を導出した。

考察

本研究の参加者13名中10名は、看護基礎教育における地域看護学領域の教育経験を10年以上有していた。しかし、作品例に対する観点別の評価結果は、参加者による各作品例に対する観点別の評点が完全に一致した作品が皆無であり、一致した割合が5割に満たない場合も複数あることを示した。これは、各大学のカリキュラムの相違による限界はあるものの、パフォーマンス評価における評価者間の評価の

一貫性を確保する困難さを示唆しており、観点別の評点の一致、すなわち、評価者間の評価の一貫性確保に向けては、観点別の評価基準（水準）を明確にして統一を図る必要がある。

本研究が明らかにした課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素のうち、【生活・地域を捉える視点の多面性】【思考の柔軟性と深さ】【イメージした生活・地域の特性や保健師の活動の現実適合性】【個から地域全体への視点の広がり】【公衆衛生看護に向き合う姿勢】の5要素は、観点別の評価基準を検討する手がかりにできると考える。パフォーマンス評価は、知識・技術の総合的な活用力に焦点を当

て、理解の深さや能力の熟達化の程度を判断する水準判断評価である（石井，2014）。上述の5要素は、知識・技術の総合的な活用力、認知領域・情意領域・精神運動領域が統合されたパフォーマンスとしての学生の反応を評価する際に、何をもって優、良、可、不可とするのかという各観点の評価基準を設定することに活用できる可能性がある。先行研究（牛尾，2014）は、地域診断演習・実習の教育目標が認知領域の目標を中心に設定され、情意領域・精神運動領域の目標をあげたプログラムが少なかったことを明らかにしており、課題提出物を教員が評価する基準に影響する5要素は、認知領域・情意領域・精神運動領域が統合されたパフォーマンスとして学習目標を設定していく際にも活用できると考える。

また、課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素のうち、【記述内容から教員が推測した学生の理解状況の程度】【公衆衛生看護に関する教員の信念や価値観】【教員による観点の解釈や目指す到達度】の3要素は、同一の作品例に異なる評価結果が示されている箇所から導出された。これは、これら3要素が、同一の学生のパフォーマンスに対する教員の評価に差異を生じる要因となっていることを示す。

このうち、【記述内容から教員が推測した学生の理解状況の程度】を導出したデータには、同一作品の同一観点に対して、優、可という全く異なる評点がつけられており、評価理由には学生の記述内容を手がかりに教員が推測した学生の理解状況が述べられていた。先行研究（牛尾，2018）は、記録物のみから学生の理解状況を評価する困難さを明らかにしており、評価の一貫性確保に向けては、可能な限り、記録物のみを介した相互作用にならないように記録物やループリックを介した対話を取り入れる等、記録物に表現できていない学生の反応をくみ取れるよう工夫する必要がある。また、学生が自分の考えをどのように表現すれば良いか思い描けるように期待されるパフォーマンスの例を示すことも有効であると考えられる。

さらに、【公衆衛生看護に関する教員の信念や価値観】も課題提出物の評価に影響を与えていた。教員は公衆衛生看護に関するエキスパートであり、自分なりの確固たる信念や価値観を有していることが

多い。教員がそのような信念や価値観について学生に伝えることは、学生が保健師としてのロールモデルの姿を思い描いたり、公衆衛生看護における重要な価値に気づいたりすることに役立つと考える。一方、教員個々の公衆衛生看護観が、公衆衛生看護のあるべき姿として影響し、課題提出物を評価する際の先入観となり、学生の反応を評価基準に照らして適切に判断することを妨げる可能性もある。また、成人学習理論は、学習者を自己決定的、能動的で自律的な存在であるとし、教授者と学習者を共同探求者として位置づけている（Knowls, 2002）。一方向的な評価のありようは、学生の能動性や自律性を妨げ、学びを深める機会を減じる恐れがあり、教員は、共同探求者である学生と相互行為をとりながら信念や価値観を探求していく姿勢を持つことが求められる。評価の一貫性確保に向けては、教員が相互に話し合い、自己の持つ信念や価値観を明確にして自己の評価の傾向を把握することが有用であると考えられる。先行研究（牛尾，2018）は、ループリックのモデレーションを通して、教員が自らの判断基準の曖昧さに気づいたり、自らの判断基準を客観視したりできたことを明らかにしており、そのような機会を持つことも評価の一貫性確保に役立つと考える。

さらに、【教員による観点の解釈や目指す到達度】も課題提出物の評価に影響を与えていた。参加者の中には、学生の反応をどの観点で評価して良いのか判断できず、観点到分けず全体的な評価を行った者がいた。また、学習課題1の作品例1-1、1-2は、観点「公衆衛生看護の専門機能に関わる価値・信念の内面化」について、「その他」の評価が多くなっていた。この要因として、学習課題1が、A氏の自死の背景にある社会的要因を特定するという、地域診断の導入段階の課題設定であり、当該観点に関する記述が作品に表現されにくかったことが考えられる。学習の途中段階で評価する場合、設定された学習課題に対応し、適切な評価観点であるかどうか、すなわちその学習課題における学習目標を明確にしておく必要があると言える。評価の一貫性確保に向けては、枠組みに用いたループリックの観点の内容について予め教員間で十分な共通理解を図ると共に、学習目標に沿って重点的に評価する観点を検討しておく必要がある。また、評価基準（水準）毎の

到達度に関し、参加者の判断が曖昧であり、評点をつけられない状況があった。これは、参加者個々の所属する大学のカリキュラムに違いがあり、求める到達度を判断しづらかったことが一因であったと考えられ、本研究の限界である。それを踏まえた上で、評価の一貫性確保に向けては、地域診断演習が提供される際の学生の学習段階に応じて、予め明確に目指す到達度を設定しておくことが重要である。

結論

1. 地域診断演習における課題提出物を教員が評価する基準に影響する要素として、【生活・地域を捉える視点の多面性】【思考の柔軟性と深さ】【イメージした生活・地域の特性や保健師の活動の現実適合性】【個から地域全体への視点の広がり】【公衆衛生看護に向き合う姿勢】【記述内容から教員が推測した学生の理解状況の程度】【公衆衛生看護に関する教員の信念や価値観】【教員による観点の解釈や目指す到達度】が明らかになった。
2. 【生活・地域を捉える視点の多面性】【思考の柔軟性と深さ】【イメージした生活・地域の特性や保健師の活動の現実適合性】【個から地域全体への視点の広がり】【公衆衛生看護に向き合う姿勢】の5要素は、観点別の評価基準（水準）を設定する際に活用できる可能性がある。
3. 【記述内容から教員が推測した学生の理解状況の程度】【公衆衛生看護に関する教員の信念や価値観】【教員による観点の解釈や目指す到達度】の3要素は、同一学生のパフォーマンスに対する教員の評価に差異を生じる要因となっており、評価者間の評価の一貫性確保に向けて、演習の到達目標を明確にすると共に、期待されるパフォーマンスの例を学生に示したり、記録物やルーブリックを介した対話を取り入れたりする等の工夫をする必要性が示唆された。

謝辞

WSに参加し研究にご協力下さった「大学間連携による地域看護学教育ファカルティディベロップメ

ント戦略会議」のメンバーの皆様にご心より感謝申し上げます。また、WS開催にご支援下さった本研究プロジェクトの共同研究メンバー、特に学び作品例の作成等に多大なるご尽力を得た東京慈恵会医科大学医学部看護学科の嶋澤順子教授に深く感謝申し上げます。本研究は、平成28～29年度科研費（基盤研究C 課題番号6K12309 研究代表者 牛尾裕子）の助成を受けて実施した。

引用文献

- 有本梓, 田高悦子, 大河内彩子, 伊藤絵梨子, 白谷佳恵. (2017). 看護基礎教育課程における地域看護診断演習プログラムの評価. *横浜看護学雑誌*, 10(1), 20-28.
- 石井英真. (2014). 活用する力を評価するパフォーマンス評価, *看護教育*, 55(8), 684-691.
- 金屋佑子, 藤井広美, 杉崎紀子. (2016). 臨地実習における地域診断のプロセスを通して保健師学生が得た学び. *了徳寺大学研究紀要*, 10, 219-226.
- Knowls, M. (2002). 成人教育の現代的実践－ペダゴジーからアンドラゴジーへ. 堀薫夫, 三輪建二監訳. 東京. 鳳書房. (原書1980)
- 松下佳代. (2012). パフォーマンス評価による学習の質の評価－学習評価の構図の分析にもとづいて－. *京都大学高等教育研究*, 18, 75-114.
- 日本地域看護学会. (2014). 平成24～26年度日本地域看護学会地域看護学学術委員会 地域看護の定義について. *日本地域看護学会誌*, 17(2), 75-84.
- 日本看護系学会協議会. (2018). 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. <http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>
- 清水美代子, 永井道子. (2015). フィールドワークを取り入れた地域診断演習における学生の学び. *日本赤十字豊田看護大学紀要*, 10(1), 123-134.
- 鈴木和代, 若杉早苗, 入江晶子, 中村秀子, 伊藤純子. (2017). A大学における保健師学生の地域診断能力の評価－ミニマム・リクワイアメンツを活用して. *聖隷クリストファー大学看護学部紀要*, 25, 19-28.
- 牛尾裕子. (2014). 学士看護学基礎教育課程におけ

る地区診断の演習・実習教育の現状. 兵庫県立大学地域ケア開発研究所紀要, 21, 37-49.

牛尾裕子, 松下光子, 塩見美抄, 宮芝智子, 飯野理恵他. (2016). 地域診断の実習・演習における教員の評価視点—ループリック開発のためのパフォーマンス評価の規準となる内容の探索—. 日

本地域看護学会誌, 19(3), 6-14.

牛尾裕子, 宮芝智子. (2018). 地域看護学教員が参加したループリックモデレーションワークショップのプロセス評価. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 25, 31-40.